

一橋大学博士学位申請論文審査報告書

令和2年2月12日

申請者：清水武

論文題目：内部監査のインセンティブと内部監査人の市場価値の変化

審査員：宍戸善一（主査）、布井千博、岩倉正和

2006年に、いわゆるJ-SOX法が成立して以来、内部監査はコーポレート・ガバナンスの表舞台に登場したが、近年の一連のコーポレート・ガバナンス改革の動きの中で、ますますその重要性が認識されつつある。ところが、これまで、内部監査に焦点を当てたコーポレート・ガバナンス研究は少なかった。本論文は、内部監査人のインセンティブに着目し、コーポレート・ガバナンス研究の観点から、効率的な内部監査の仕組みを模索したものである。

本論文は、内部監査部門の独立性の定義とその変遷を追った第I部、内部監査部門のミッションと役割の変化が内部監査人のインセンティブ強化につながったことを論じた第II部、内部監査部門から社長ないし監査機関に対するレポート・ラインの設計と内部監査人のインセンティブの関係を論じた第III部、取締役会のモニタリング機能の違いが内部監査人のインセンティブに与える影響について論じた第IV部、内部監査関係者を内部監査部門長と内部監査人に分けて、それぞれのインセンティブを分析した第V部、内部監査人の労働流動性が高まっていることに着目し、それが内部監査人のインセンティブに与える影響について論じた第VI部、および、全体を総括して、有効なインセンティブシステムとしての内部監査部門の方向性を示唆した第VII部結論からなる。

本論文の意義として、以下の3点をあげることができる。

第1に、内部監査が有効に機能するための前提として、内部監査人のインセンティブに着目し、その詳細な分析を行い、コーポレート・ガバナンスの全体像の中に位置づけたことである。このような試みは他に類を見ない。

第2に、内部監査部門の独立性や役割の歴史の変遷を、米国IIAの意見書と日本内部監査協会の内部監査基準を比較しながら、丹念に跡付けただけでなく、その変遷が内部監査人のインセンティブに与えた影響を分析したことである。

そして、第3に、260社の内部監査人（有効回答数170件）に対するサーベイ（アンケート調査）を行うとともに、筆者の内部監査人としての長年の経験に基づいたアネクドットを交えて、これまでほとんど紹介されなかった内部監査人の具体的なイメージを提示し、内部監査人のインセンティブ分析の説得性を増したことである。

もっとも、本論文にも問題がないわけではない。今後の内部監査実務への提言が必ずしも十分に具体性のあるものになっていないこと、また、比較法ないし比較制度分析をさらに行う余地があったと思われることなどである。

以上のような論文の評価と口述試験の結果に基づいて、審査員一同は、申請者清水武氏に一橋大学博士（経営法）の学位を授与することが適当であると判断する。